

超自然的能力 (*siddhi*) 体験について

～『ヨーガ・スートラ』から現代的解釈に臨む～

番 場 裕 之

はじめに

ヨーガの思想は、強烈な神秘体験をその基底に置いている修行の体系である。その神秘体験を思惟と反省によって分析し、総合し、思想の形に組織した神秘思想である [岸本：52]。修行過程で現れる超自然的能力 (*siddhi*) について岸本英夫は、それは、何の不思議もない、生理的・心理的現象である。しかし、客観的に見れば、その中に論理の飛躍があることが明確な場合が多い。神通といわれるものは、空想の産物であり、多分の幻覚や錯覚を含んでいる。しかし、その全部が荒唐無稽というわけではなく、七分三分の虚実の混淆を予想して接する必要がある [岸本：270-272] と言い切る。

しかし、ヨーガの修行項目は、神秘体験を得るための神秘思想にのっとった神秘修行、手段であり、瞑想を通して最終目的に至る解脱は神秘体験の高次元のものである。それに対して、*siddhi* は修行の終着点ではなく過程において体験されるという点において、低次元の神秘体験のひとつであり、世俗と超俗をつなぐ体験であるといえよう*1。

Yogasūtra (以下 *YS*) では、3-16以降は綜制によって得られる40数種の *siddhi* を雑然と説いている*2。195の *スートラ* のうちに占める割合からすれば、その重要性が自ずと見て取れる。*YS* の *siddhi* 説は3箇所を示されている。それは、苦行によって不浄が破壊されることを説く箇所 (2-43)*3、綜制 (*saṃyama*) を手段として纏めて説かれている箇所 (3-16以降)*4、*siddhi* を誘う手段である素性、薬草、真言、苦行、三昧等を説く箇所 (4-1) であり*5、*YS* の本文または註釈において、発現手段や原理とそれによる *siddhi* の種類などが提示される*6。

後で見るように、特定の手段のみが特定の *siddhi* を発現させるものではないことから、現れた *siddhi* は基本的に並列に扱うことができるだろう。苦行による *siddhi* を定義して、「身体と感官に現れるもの」(*YS* 2-43) としているが、これもすべての *siddhi* に共通して用いられる定義と見ることができる。したがって、*siddhi* は特定の条件下で身体や感官に現れる様々な非日常的变化といえよう。

本稿では、ヨーガ体験を宗教神秘主義体系としてアプローチした岸本の理解を借りながら、神秘体験としての *siddhi* を現代的に位置づけようと試みる。現代ヨーガ (Modern Yoga) の実践者が急増し、マインドフルネス瞑想等を通して神秘体験に興味を持つ人口

も増えているが^{*7}、ヨーガ行法の *siddhi* を正しく理解することによって、特殊な体験に触れたときでも誤った方向に陥ることのないように、実践者の灯明となれば幸いである。

第一節 *siddhi* を導く手段と種類について

先に示した「特定の条件下」とは、*siddhi* を導くための条件とされるもので、YS 4-1 は、種姓 (*janma*)、薬草 (*oṣadhi*)、真言 (*mantra*)、苦行 (*tapas*)、三昧 (*samādhi*) の五種類を挙げている。YS で示される *siddhi* を体験するには、このいずれかが必要とされる。*siddhi* の手段は『俱舍論』でも、「神境智類總有五種。一修得。二生得。三呪成。四薬成。五業成。」と示されている^{*8}。内容は完全に一致しないが、重複項目もあり、同様に示されていたことが分かる。

1. 種姓 (*janma*) による *siddhi*

種姓による *siddhi* については、*Yogabhāṣya* (以下 *YBh*) が「他の身体に入る (*deha-antarita*) のことである^{*9}」と示している。これについて、*Tattvavaiśāradī* (以下 *TV*) は、「どこかの天界に生まれることだけで、神の身体に入るという超自然力や微細化 (*aṇiman*) などが生ずる^{*10}。」とし、天界において、神々の身体に入って神として生まれることを指している。後世の註釈である *Rājamārtaṇḍa* (以下 *RM*) でも *Yogasudhākara* (以下 *YSu*) でも、いずれも種姓による *siddhi* は、あたかも翼のある鳥が空中を飛ぶようなものであり、又、カピラ仙のような生得の美德のようなものと表現し、特別な生まれを持った場合におこる特別な体験としている^{*11}。

ところで、他の身体に入るという点で、類似性のある *siddhi* が、綜制を手段として述べられている。それは、綜制によって心を束縛する原因が弱まり、心の進路を理解できることによって、心が他人の身体に入ることができる^{*12}のだという。ここの他人の心に入るは、*para-śarīra-āveśa* と表現され、心が他の身体に自由に出入りするものとされている。両者は別種のものであるが、一方では厳しく高次の綜制の後に発現する *siddhi* が、他方では種姓のみで *siddhi* が起こるとしている。

また、微細化 (*aṇiman*) は、身体的 *siddhi* の代表的なものであり、種姓、真言、苦行、綜制がその手段とされている。綜制による五元素 (*bhūta*) の克服によって微細化などの身体的 *siddhi* が生ずると説く箇所では、「(五元素の) 粗雑性、本性、微妙、追従性、有意性などに綜制することによって、五元素を克服し、それによって、微細になるなどの身体的 *siddhi* が起こる」とされている^{*13}。苦行 (*tapas*) による不浄破壊によって起こる微細化と綜制 (*saṃyama*) による五元素の克服によって起こる微細化の両者に如何ほどの相違があるかは分からないが、特定の手段のみが特定の *siddhi* を発現させるのではなく、*siddhi* を導く五つの手段が様々な *siddhi* を起こすという構図だとすれば理解しやすい。厳しい修

行の後に発現する *siddhi* であっても種姓のみで *siddhi* に達していても、そのこと自体には重要な問題が無いと考えられる。

2. 薬草 (*oṣadhi*) による *siddhi*

薬草による *siddhi* については、*YBh* が「アスラの神殿において不死の霊薬によって生ずるもの^{*14}」とし、*TV* は、「アスラの神殿に到達した人が、そこでもたらされた不死の霊薬を享受することで不老不死と他の *siddhi* を獲得したように、この世にいながらにして不死の霊薬を享受することで同様の *siddhi* を獲得するとしている。」^{*15}

薬草の内容については、*Maṇiprabhā* (以下 *MP*) は特殊な薬草 (*oṣadhi-viśeṣa*) とするが^{*16}、*RM* では、水銀や不死の霊薬 (*pāradādi-rasāyanādi*) と表現している^{*17}。それに対して、*Carakasamhitā* では *oṣadhi* は果実が熟してから枯死するもの (*oṣadhyah phala-pāka-antāh*)^{*18} といい、鉱物性とも植物性とも考えられるが詳細は明確ではない。

薬草の調合については、「マントラの音節の組み合わせと同様に特殊なもので、たとえ千年を要しても世間的認識に従事するものには不可能なもの」としている^{*19}。薬草の調合がこのような性格のものであることから、註釈書から *oṣadhi* の内容を見つけることは困難だろう。註釈からは、*oṣadhi*、*rasāyana*、*pārada* 以外は見出せなかった。また、薬草による *siddhi* は不老不死を基本としているようで、ヴィンディヤ山に住むマーンダヴァ仙が霊薬を使用したことを先例としている^{*20}。

五つの手段のうち、種姓と薬草はともにヨーガ修行と本質的に関わりを持つものではない。それらを統合的に判断すると、種姓の場合は、生まれながら幻覚や錯覚を生じやすい気質があること、薬草の場合は、不死の霊薬としてはいるが、実際は、幻覚や錯覚を導く何らかの飲用物と考えられる。修行実践項目である後三者の真言、苦行、三昧と前二者の種姓、薬草とは根本的立場の相異が見て取れる。前二者は古来の伝承に基づいた解釈だろうが、実際の修行上の重要性を示したものではない。

3. 真言 (*mantra*) による *siddhi*

YS で *mantra* の語が使われるのはこの箇所のみで、その内容については説明されないが、*praṇava, japa* (*YS* 1-27, 28)、*īśvara-praṇidhāna* (*YS* 1-23, 2-1)、*svādhyāya* (*YS* 2-1) など、それに関係する語は何度か使用されている。読誦 (*svādhyāya*) は聖音オーン (*praṇava*) や解脱へ導く聖典を唱えることであり、それは自在神を表したものであることから、*siddhi* を導くマントラは、自在神祈念と読誦と関係が深い。*Sarvadarśanasamgraha* では、「読誦とは聖音オーン、ガーヤトリーなどのマントラを唱える事」とし、「聖句には、ヴェーダに属するものとタントラ的なもの」の二種類あるとしている^{*21}。

YBh では「空中移動 (*ākāśa-gamana*)、微細化 (*aṇiman*) などを獲得する^{*22}」ものと説

かれる。YSでは空中移動は3-42、微細化は3-45にあり、前に見たように、後世の註釈書でも空中移動、微細化などの *siddhi* は幾度となく触れられている。

岸本はこの空中移動について、「客観的な見地からは、空中飛揚はもとより不可能なことである。しかし、その考え方の全部が純粋な空想の産物ではない。」また「生理心理的事実とそれに対する附会的な説明との錯綜がある。」とし、激しい修行によって生理的心理的事実として触覚や筋肉感覚に異常をきたし、その場合に、当事者は重量感が消滅したと感じ、これを空中飛揚の事実と混同するのだとしている [岸本：271]。

しかし、こうした客観的分析とは別に修行当事者にとっては、空中の飛揚感が実感として体験されている。その場合、実際に飛揚したかという客観的物理解釈は必ずしも重要ではなく、主観限定的な空中移動体験は紛れもない事実なのである。こうした主観客観間の認識上の相異が *siddhi* の特徴といえる。

4. 苦行 (*tapas*) による *siddhi*

苦行による *siddhi* について、いつでもどこでも望みのままの姿 (*kāma-rūpin*) をとり、望むがままに移動する (*kāmagā*) という、随意なる超自然的能力があるとしている^{*23}。苦行 (*tapas*) と超自然的能力 (*siddhi*) を詳説しているのは YS 2-43とその註である。苦行によって不浄が破壊されることから、身体と感官に関する *siddhi* が生ずるとしている。そして YBh では身体が微細になる (微細化) 等の身体的 *siddhi*、遠くから見聞きする (遠方見聞力) 等の感官的 *siddhi* が生ずると補足している^{*24}。

身体的 *siddhi* については、YBh では微細になることなどとしていたことに対して、TV では、それが巨大化、軽量化、望むものを獲得する力をいうものだとしている^{*25}。しかし、感官的 *siddhi* については、YBh の示した遠方見聞力以外には補足されていない。それは、先述のように五つの手段の提示がされてはいても、特定の手段が特定の *siddhi* を起こすという図式ではなく、五つの手段が様々な *siddhi* を起こすという構図で述べられていることが関係しているようである。

ハタ・ヨーガ期の10~16世紀に著された後世の註釈書では、既存の註釈書からの引用が多く特に目新しい記述は見当たらないが、そのうちで比較的しっかりと説かれているものを RM 2-43から引用する。

なお、苦行によって不浄が破壊されるので、身体と感官に関する超自然力が生ずる。実行しつつある苦行は意志の力にもとづいているので、煩惱などを原因とする不浄を破壊する手段によって、身体と諸感官の超自然力を多く引き起こす。これは、チャンドラーヤナなどによって心の煩惱が破壊されるので、その (煩惱) 破壊のゆえに、微細なものや隠されたもの、遠方のものなどを諸感官が知覚するなどの能力を明示している。(また) 意志に応じて、身体が微細、巨大になるなどという意味である^{*26}。

ここは *tapas* による不浄の消滅の結果として起こる超自然的な能力 *siddhi* を中心に説いているので、*tapas* の内容として *YBh* 2-32で示された制食行のクリッチュラ、チャンドラーヤナに触れられる程度で、*siddhi* の説明としては目新しい記述はない。*siddhi* の中心はやはり *YS* 3-16以降に綜制 (*saṃyama*) による果報として纏められた箇所であろう。これについては次節でまとめて取り扱うこととする。

第二節 綜制 (*saṃyama*) による超自然力 (*siddhi*) について

YS では特定の条件下で身体や感官に現れる様々な変化を *siddhi* としている。したがって、苦行と同じ勸戒 (*niyama*) の中で説かれていても、知足の果報は心的境位と関わる無上の安楽の獲得であり、*siddhi* とは質的に異なっていることが分かる。素性や薬草、真言、苦行、三昧が特定の条件、すなわち、手段であるが、これらのうちで、三昧は、もともとヨーガの修行の中心であり、且つ *siddhi* との関わりも深い。*siddhi* と綜制による体験は、次元の高低の差こそあれ、いずれもヨーガによる神秘体験であり、平常時の世俗的認識を超えた点では共通している。*YBh* では「三昧による超自然的な能力は(すでに)説明された*²⁷」と述べられるが、それは、*YS* 3-16~48*²⁸において、綜制による *siddhi* が纏めて説かれていることを指している。

岸本は、*siddhi* 全体を特殊な智見、身に備わる特殊能力、*prāṇa* 気に関する神通、特殊力の体得にわけて分類している [岸本：275-279]。繁雑な *siddhi* を四種に整理分類した点は非常に分かりやすく評価されるべきものであるが、四種の分類で網羅し尽くせていない点とそれぞれの概念がいささか曖昧である点は残念である。明確な整理をしえなかったのは、内容的に理解しにくいものを多く含み、且つ各々に特徴的だからである。*YS* は身体的 *siddhi* と感官的 *siddhi* に分類し、*YBh* は身体的 *siddhi* を身体が微細になる(微細化)等とし、感官的 *siddhi* を遠くから見聞きする(遠方見聞力)等としている。身体的 *siddhi* と感官的 *siddhi* の二分類では更に分類が荒くなるが、*siddhi* は個別の特徴が多く、より細かく分類してもし尽くせるとは言いがたい。ここでは、*YS* の二分類に基づいて整理し、いずれとも判別しにくいものは、その他の *siddhi* という三分類とすることとする。

1. 身体的超自然的な能力 (*kāya-siddhi*)

身体的 *siddhi* は、苦行によって不浄が破壊されることによるもので、感官的 *siddhi* とともに示される。ただ、その内容が具体的に示されるのは註釈書であって、*YS* ではない。*YBh* によると、それによって身体が微細になる等の身体的 *siddhi* または遠くから聞いたり、見たりする等の感官的 *siddhi* が起こるとしている。*siddhi* を纏めた *YS* 3-16~48でも、身体的 *siddhi* について、現代的感觉として我々が納得のいく説明はなく、*TV* は巨大化、軽量化、望むものを獲得する力とし*²⁹、後世の註釈もこの解釈をほぼ踏襲している。

身体的 *siddhi* は、五元素の克服を根拠として説明されてはいても、現代的感覚として客観性のある巨大化や微細化であるとは考えられない。おそらく、変容した認識によって、極めて個人的、且つ感覚的に身体的側面に特定の変化が起こると捉えられたのであろう。その点で、身体的側面に起こる *siddhi* も知覚、認識に関わるものと理解できる。従って、岸本が言うように、多分に空想と幻覚と錯覚を含んでいると考えるのが妥当と考える。

2. 感覚的超自然的能力 (*indriya-siddhi*)

感覚的 *siddhi* は、特定の条件にしたがって認識や知覚が変容することによって、感覚的側面に極めて個人的に現れる神秘体験である。YS 3-16~48で総括され、身体的 *siddhi* に比して圧倒的に記述量が多い。その中で、感覚的 *siddhi* と思われるものを下記にまとめてみた。

- [3-16] 過去と未来に対する知←三種の転変への綜制
- [3-17] 生物の叫び声を知る←言葉と意味と概念の区別への綜制
- [3-18] 前世を知る←綜制によって潜在印象を直観
- [3-19] 他人の心を知る←綜制によって想念を直観
- [3-22] 死期を予期する←結果を導くものと導かない業への綜制
- [3-25] 微細なもの、隠されたもの、引き離されたものを知る←(心の)作用の光を照らす
- [3-26] 世界を知る←太陽への綜制
- [3-27] 星の編成を知る←月への綜制
- [3-28] 星の動きを知る←北極星への綜制
- [3-29] 身体の組織を知る←臍の輪への綜制
- [3-32] 神性を観る←額の(中の)光明への綜制
- [3-33] 一切(を知る)←照明智によって
- [3-34] 心を意識する←心臓への綜制
- [3-35] プルシャを知る←プルシャへの綜制
- [3-36] 照明智、(超自然的な)聴覚、触覚、視覚、味覚、嗅覚が生ずる←プルシャへの綜制
- [3-41] 超自然的聴覚が生ずる←耳と虚空の結合関係への綜制
- [3-47] 諸感官を克服する←(感覚器官の)把握作用、本性、我相、追従性、有意性への綜制^{*30}

上記に挙げたもののうち、ほとんどが *jñānam* で結ばれており、何らかの認識、知覚に関わっていることが分かる。感覚的 *siddhi* は、認識や知覚が変容することによって現れる神秘体験なのである。

siddhi は、身体的なものであっても感官的なものであっても修行者が主体的に感じる体験である。高次元な神秘体験である無想三昧 (*asamprajñāta-samādhi*) や真我独存 (*kaivalya*) に対して、*siddhi* は修行の終着点ではなく過程において体験されるという点において、世俗と超俗をつなぐ体験である。岸本の指摘のように、実質的な部分と空想的な部分に分けて検討する必要があるかもしれない [岸本：273]。

3. その他の超自然的能力 (*siddhi*)

身体が微細になる等といった身体的 *siddhi* は文面通りに読んでも現代的感觉では理解できなかったが、認識が変容することによって、身体的側面に起こる極めて個人的、且つ感官的な特定の変化と捉えることで、認識が関与するものと理解できた。それに対して、感官的 *siddhi* は、変容した認識や知覚がそのまま通常では考えられない認知を当事者に体験させる神秘体験である。この解釈を用いれば、身体的であっても感官的であっても「生理心理的事実とそれに対する附会的な説明との錯綜」であり、下記のものもそういう意味では、同類である。相違点は、身体的な表現をしていないこと、*jñānam* で結ばれるように直接的に何らかの認識、知覚に関わっていないと思われることである。

[3-21] (身体は) 不可視となる←身体の姿に対する綜制

[3-23] 諸々の力がある←慈等に対する綜制

[3-24] 象の力などが生ず←(象などの) 諸々の力に対する綜制

[3-30] 飢えと渇きが消滅する←喉のくぼみに対する綜制

[3-31] 心の安定性が生ずる←亀の管に対する綜制

[3-38] 心は他人の身体に入ることができる←(綜制によって)

[3-39] 水、泥、刺などに煩わされず(死後は) 上昇する←(綜制による) ウダーナ
気の克服

[3-40] 火焰が生ずる←(綜制による) サマーナ気の克服

[3-42] 空中移動ができる←身体と虚空の結合関係に綜制するか、軽い綿糸に三昧

[3-43] (心の) 光明を覆い隠すものを破壊される←心が(身体を離脱する) とき

[3-44] 五元素の克服←(五元素の) 粗雑性、本性、微妙、追従性、有意性などに綜制

[3-52] 識別から生ずる知があらわれる←瞬間瞬間(刹那) とその時間の継続に綜制

我々がこうした記述に接した時にその理解を誤るのは、共通した思想的根拠、民族的伝統、時代性を持ちあわせていないことが大きく影響している。当時の思想を学び、共通したヨーガの実践を持ちあわせたとしても、それは容易なことではない。しかし、現代でもヨーガの実践を経験すれば、多かれ少なかれ、なんらかの *siddhi* を体験する。その意味を正しく理解しておくことで、道を正しく歩むことができるのである。次に *siddhi* の意味を総括しよう。

第三節 *siddhi* の意味

修行者が主体的に感じる体験のうち、高次元な神秘体験である無想三昧 (*asamprajñāta-s.*) や真我独存 (*kaivalya*) に対して、*siddhi* は、修行の過程において体験されるという点において、世俗と超俗をつなぐ体験といえる。修行過程において、当事者は様々な *siddhi* を体験する。

重要なことは、宗教体験というものの自体が、本来、極めて個人的な体験だということである。身体的側面や感覚的側面にある種の変調が起こったと感じたことも個人的体験である。少なくとも *YS* で扱われる *siddhi* は、社会的かかわりを持って表現をされることはない。第三者が現れることもない、あくまでも当事者が主観的に捉えたものであり、こういう神秘体験を「思惟と反省によって分析し、統合し、もって思想の形態に組織したものが神秘思想である。」[岸本：52]。

これによって先達の *siddhi* 体験が私たちに伝承されている。しかし、皮肉にも、未経験なものにその体験が伝わることによって先行して認識され、誤解を伴ってその実態理解を困難にしている一面もある。「やがて啓けるべき体験についての解釈であり、説明 [岸本：56]」をあらかじめ学習しているからであるが、反面、「神秘体験そのものと神秘体験に関する説明、すなわち、神秘思想とが混同されることが多い [岸本：54]」のも事実である。

しかし、誤解を省みずに述べると、高次元な神秘体験である無想三昧や真我独存、そして世俗と超俗をつなぐ *siddhi* は、宗教体験として確実に存在している。それは間違いのないことである。これを単に錯覚であると断ずることは、すべての神秘体験を虚無なものとしかねない。ただ、*siddhi* を確実に存在するものとするには、極めて重要な条件がある。それは、やがて啓けるべき体験についての理解として、*siddhi* は社会的かかわりを持たない極めて個人的な体験であるとする点、*siddhi* の体験はあくまでも修行の終着点ではなく過程において体験される副産物であるという点を強く認識して修行に入る必要がある。

siddhi 体験は個人的な体験であるが故に、空中移動 (*ākāśa-gamana*) や身体の微細化 (*animan*) 体験をした場合でも、それが当事者的に疑い得ない事実であっても、客観的事実とは限らないからである。そして、*siddhi* の体験は修行の終着点ではない。それが如何なる体験であっても、擬似解脱体験であっても、ヨーガ実践者にとっては *siddhi* は決して至高、最上なるものではなく、修行の過程であり、自身の修行段階を知る手段であると理解されなければならない。*tapas* の本務は様々な不浄を破壊して修行を阻害するものを排除することである。*siddhi* は附加的なものであって、*tapas* の果報は *siddhi* ではなく不浄破壊なのである。

siddhi 体験が高次元な神秘体験である無想三昧や真我独存であるか、過程的な体験であ

る *siddhi* であるかを明確に区別することが必要である。その役割を担っているのが神秘思想体系としての *YS* であり、そのなかでも、*YS* 3-37 に重要な意味がある。

これら（超自然的な能力）は、三昧の状態にあるときには障碍であり、（心が）散乱した状態にある時には超自然的な能力となる^{*31}。

岸本が指摘するように、*YS* が *siddhi* を取り扱うことの意味は、その肯定の是非ではなく、ヨーガ体系が *siddhi* を導入しながら、それに明確な限界を与えて、修行の究極目標と混同しないように配慮した点である [岸本：279]。*YS* において40数種の *siddhi* を示した理由は、如何なる *siddhi* であっても、決して高次元な神秘体験としての無想三昧や真我独存ではなく、過程的な体験であることを明示するためであった。

三昧状態と散乱状態という境地の相違によって、それが *siddhi* ともなり修行の障碍ともなるのである。*YBh* はこれを次のように註釈している。

三昧の心が発現しつつあるので、これら照明智などは障碍となる。この（ヨーガ）の教義に反するからである。心が散乱しつつある場合には、超自然的な能力となる^{*32}。

さらに *TV* は、「三昧状態にあるヨーガ行者によって、超自然的な能力は放棄されなければならない」と補足している^{*33}。

ヨーガの実践は情動を静め冷静沈着な自己洞察をもって真我に到ることをその本道と為すものである。したがって、以上のように *siddhi* の立場を明白に記し、その特性を理解させておくことは、やがて啓けるべき体験に対する *YS* の極めて重要な役目なのであり、*siddhi* 体験に執着して、ヨーガの道を踏み外すことのないよう忠告しているのである。

むすび

ヨーガ人口が急増する中で、マインドフルネス瞑想等を通して神秘体験に興味を持つ人口も増えている。また、神秘体験をうたい文句にして、信者を増やしている団体もあると聞く。そうした中で、*siddhi* のような体験がヨーガの目的ではなく、本道でもないということを示すことの重要性を強調するのが本稿の目的であった。

ただ、ヨーガ体験者（実践家）とそうでないもの（思想家）の間には、あきらかな立場の違いがあることも事実である。ヨーガは本来体験的なものである。岸本が示すように、神秘体験→神秘思想→神秘修行という流れがあるならば、体験に則った思想に基づいたヨーガ修行が本来の形であり、その思想の中には、ヨーガの *siddhi* 観も含まれている。体験がなければヨーガではない。しかし、思想を心得ないで我流の体験が先行する場合、すなわち、ヨーガの伝統的思想体系を踏まえない場合もヨーガとは言えないのである。

ヨーガが体験的なものである限り、それが個人的限定的なものであるとしても、当事者の体験は真実に他ならない。これを荒唐無稽であるとか、科学的客観性が無いということなどで、幻覚や錯覚と断ずることはできない。*siddhi* 体験は真実なのである。それと同時に極

めて個人的な体験であり、それはあくまでも修行の終着点ではなく、過程において体験される副産物であり、修行本道ではないという点を強く認識することがヨーガに入る上で必須といえるだろう。

- * 1 遠藤康「ヨーガ的神秘体験と知識：岸本英夫の主知的宗教神秘主義体系説をめぐって」『愛知文教大学比較文化研究』1巻、1-13、1999年
- * 2 高木神元『古典ヨーガ体系の研究』法蔵観、1991年、p.59.
- * 3 *kāye-indriya-siddhir aśuddhi-kṣayāt tapasaḥ // YS 2-43*
- * 4 *prīṇāma-traya-saṃyamād atīta-anāgata-jñānam // YS 3-16*
- * 5 *janma-ośadhi-mantra-tapaḥ-samādhijāḥ siddhayaḥ // YS 4-1*
- * 6 *Amarakoṣa* の註釈書、*Amarakoṣodghāṭana* 1-1-36では、*aṇiman*、*mahiman*、*gariman*、*laghiman*、*prāpti*、*prākāmya*、*īsitva*、*vaśitva* という *aṣṭa-siddhi* といわれる8種の超自然的能力が説かれるが、YSではこのような定型化された表現はされていない。内容的にはYSとの重複がある。
- * 7 2005年当時の推計として、日本のヨーガ人口について23万人（2004年）が102万人（2010年）、そして351万人（2015年）と公表された。門倉貴史「急拡大が見込まれる日本のヨーガ市場」『マクロ経済分析レポート』2005年5月18日。また、ヨーガなどのスピリチュアルな実践の様態については、永嶋弥生「「鍛える私」から「癒される私」へ～現代ヨーガに関する文化史的研究～」早稲田大学スポーツ科学研究科修士論文、2011年、伊藤雅之「現代ヨーガとスピリチュアリティ」『アジア遊学84特集：アジアのスピリチュアリティ～精神的基層を求めて』勉強出版、pp.154-165、2006年を参照。
- * 8 『阿毘達磨俱舍論』大正蔵29巻 p.145
- * 9 *deha-antaritā janmanā siddhiḥ // YBh 4-1*
- * 10 *kvacid devanikāye jāta-mātrasya iva divya-deha-antaritā siddhir animādyā bhavati ̇iti // TV 4-1*
- * 11 *kāścana janma-nimittā eva siddhayaḥ / yathā---pakṣyādinām ākāśa-gamanādayaḥ / yathā vā kapila-maharṣi-prabhṛtinām janma-samanantaram eva upajāyamānā jñānādayaḥ samsiddhikā guṇāḥ // RM 4-1*
- * 12 *bandha-kāraṇa-śaithilyāt pracāra-saṃvedanāc ca cittasya para-śarīra-āveśaḥ // YS 3-38*
- * 13 *sthūla-svarūpa-sūkṣma-ānvaya-arthavattva-saṃyamād bhūta-jayaḥ // YS 3-44*
tato ̇nima-ādi prādurbhāvaḥ kāya-saṃpat tad-dharma-anabhighātaś ca // YS 3-45
- * 14 *ośadhibhir asura-bhavaneṣu rasāyanena ̇iti ̇evam ādhiḥ // YBh 4-1*
- * 15 *manuṣyo hi kutaścīn nimittād asura-bhavanam upasaṃprāptaḥ kamanīyābhir asura-kanyābhir upanītam rasāyanam upayujya-ajara-amarāṇatvam anyāś ca siddhir āśādayati / iha eva vā rasāyana-upayogena yathā māṇḍavyo munī rasa-upayogād vindhyavāsi ̇iti // TV 4-1*
- * 16 *ośadhi-viśeṣa-sevayā māṇḍavyādinām // MP 4-1*
- * 17 *ośadhi-siddhayaḥ yathā --- pārādādi-rasāyanādi-upayogāt // RM 4-1*
- * 18 *Carakasamhitā Sū.-sth. 1-72*
- * 19 *na ca ośadhi-bhedānām tat-samyoga-viśeṣānām ca mantrānām ca tattad-varṇa-avāpa-uddhāreṇa sahasreṇa ̇api puruṣa-āyusaḥ laukika-pramāṇa-vyavahāri śaktaḥ kartum anvaya-vyatirekau // TV 1-24*
- * 20 *yathā māṇḍavyo munī rasa-upayogād vindhyavāsi ̇iti // TV 4-1*
- * 21 *praṇava-gāyatri-prabhṛtinām mantrānām adhyayanam svādhyāyaḥ / 15-1,362*
te ca mantrā dvividhā vaidikās tāntrikās ca / 15-1,363
- * 22 *mantrair ākāśa-gamana-aṇimādi lābhaḥ // YBh 4-1*
- * 23 *tapasā saṃkalpa-siddhiḥ, kāma-rūpī yatra tatra kāmaga ̇iti ̇evam ādhi // YBh 4-1*
- * 24 *tad āvaraṇa-mala-apagamāt kāya-siddhir aṇimādyā /*

- tatha indriya-siddhir dūrāt śravaṇa-darśanādyā'iti // YBh 2-43*
- *25 *aśuddhi-lakṣaṇam āvaraṇaṃ tāmasam adharmādhi /
añimādyā mahimā laghimā prāptiś ca / sugaman // TV 2-43*
- *26 *kāya-indriya-siddhir aśuddhi-kṣayāt tapasaḥ /
tapaḥ samabhyasamānaṃ cetasaḥ kleśādi-lakṣaṇa-aśuddhi-kṣaya-dvāreṇa
kāya-indriyāṇāṃ siddhim utkarṣam ādadhāti / ayam arthaḥ -- cāndrāyāṇādinā
citta-kleśa-kṣayas tat kṣayād indriyāṇāṃ sūkṣma-vyahita-viprakṛṣṭa-darśanādi-sāmarthyam
āvīr bhavati / kāyasya yathā-iccham aṇutva-mahattvādini // RM 2-43*
- *27 *samādhi-jāḥ siddhayo vyākhyātāḥ // YBh 4-1*
- *28 *YS の 3 章は55偈までであり、4-1 まで siddhi の記述は続くが、49偈以降は kaivalya の記述が増え、siddhi そのものを扱っていないので、敢えて48偈までとした。これについては、別途検討が必要だろう。*
- *29 *añimādyā mahimā laghimā prāptiś ca / TV 2-43*
- *30 *priṇāma-traya-saṃyamād atīta-anāgata-jñānam // YS 3-16
śabdha-artha-pratyayānām itara-itara-adhyāsāt
saṃkaras-tat-pravibhāga-saṃyamāt sarva-bhūta-ruta-jñānam // YS 3-17
saṃskāra-sākṣāt karaṇāt pūrva-jāti-jñānam // YS 3-18
pratyayasya para-citta-jñānam // YS 3-19
sa-upakramaṃ nirupakramaṃ ca karma tat-saṃyamād aparānta-jñānam ariṣṭebhyo vā // YS 3-22
pravṛṭty-āloka-nyāsāt sūkṣma-vyavahita-viprakṛṣṭa-jñānam // YS 3-25
bhuvana-jñānaṃ sūrye saṃyamāt // YS 3-26
candre tārā-vyūha-jñānam // YS 3-27
dhruve tad-gati-jñānam // YS 3-28
nābhi-cakre kāya-vyūha-jñānam // YS 3-29
mūrdha-jyotiṣi siddha-darśanam // YS 3-32
prātibhād vā sarvam // YS 3-33
hṛdaye citta-saṃvit // YS 3-34
sattva-puruṣayor atyanta-asamkīrṇayoḥ pratyaya-aviśeṣo bhogaḥ parānthāt
svārtha-saṃyamāt puruṣa-jñānam // YS 3-35
tataḥ prātibha-śrāvaṇa-vedanā-darśa-āsvāda-vārtā jāyante // YS 3-36
śrotra-ākāśayoḥ sambandha saṃyamād divyaṃ śrotram // YS 3-41
grahaṇa-svarūpa-smitā-anvaya-arthavattva-saṃyamād indriya-jayaḥ // YS 3-47*
- *31 *te samādhāu'upasargā vyutthāne siddhayaḥ // YS 3-37*
- *32 *te prātibhādayaḥ samāhitacittasya utpadyamānā upasargās tad-darśana-pratyanikatvāt /
vyutthita-cittasya'utpadyamānāḥ siddhayaḥ // YBh 3-37*
- *33 *yoginā tu samāhita-cittena'upanātābhyo 'pi tābhyo virantavyam / TV 3-37*

略号

岸本：岸本英夫『宗教神秘主義：ヨーガの思想と心理』大明堂、1959

Yogasūtra, Yogabhāṣya, Tattvavaiśārādī

Pātañjalayogasūtrāṇi, Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ, No.47, 1984

Rājāmārtaṇḍa by Bhojarāja, Yogasudhākara by Sadāśivendra Sarasvatī,

Vṛtti by Nāgoji Bhaṭṭā, Mañiprabhā by Rāmānandayati

Yogasūtram by Maharṣi Patañjali with Six Commentaries, The Kashi Sanskrit Series No.83, 1982

Sarvadarśanasamgraha

Government Oriental Series Class A, No.1, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1978

Carakasamhitā

Text with English Translation Vol.1, P.V. Sharma, Chaukhambha Orientalia, 1994

Amarakoṣodghāṭana

The Nāma-līnga-anuśāsana (Amarakoṣa) of with commentary (Amarakoṣodghāṭana) of Kshīrasvāmin

By Krishnaji Govind Oka, Law Printing Press, Poona, 1913

キーワード 超自然的能力 *siddhi* 神秘体験 岸本英夫 『ヨーガ・スートラ』